

いじめ問題対策連絡協議会から
～見守り、寄り添う教育を～

昨年度末に本町で行った『いじめ問題対策連絡協議会』において、貴重なご意見をたくさんいただきました。いじめ問題に関しては、拙稿No.8で取り上げておりますが、改めて今回のご意見の一部をご紹介します。新年度を迎え、全ての児童生徒にとって楽しい学校であるための、ヒントにしていいただければ幸いです。

- 「いじめが解決した件数」というデータがあるのですが、「解決した」というのは、何が「解決した」ということなのでしょう。
- 全否定された経験をもつ子どもは、その子がどんなにがんばってその後の人生を歩んでも、なかなか心の問題が解決せず、周りの人が「そこまで思わなくてもいいよ」と伝えても、自己肯定感が低くなってしまっていることが多いです。
- 小学生、中学生の時代に、「もう解決しました」と言われてしまうと、その子がその後も抱えている自己肯定感の低さをどうしていったらいいのかと思ってしまう。
- ある時、1人の子どもが、2人の子どもたちから明らかに何か言われている場面に遭遇しました。すぐに声を掛けずに、2人が去ってから、言われていた子どもに「どう？今、ちょっと嫌なことがあった？」と、なんとなく聞いてみたら、「大丈夫です」と言うのです。思春期に入った子どもたちにとってみると、困ったことを素直に言えない時もあるのです。「こういうのは恥ずかしいことなので、言うてはいけない」と思って、言えない子どももいるのです。
- 一番大事なことは「大人がいつも見ているよ」ということを、子どもが感じてくれることだと思います。すぐに声をかけるのではなく“見守る”ということは、とても大切なことではないかなと感じています。
- 小学校高学年にもなると、グループができるのですが、その中に強い子がいると、本当はそのグループから離れたいと思っても、その子がいつもターゲットを替えながらいじめをするので、なかなか離れることができないでいるのです。
- あるとき、中学生の男子が「学校に行きたくない」と言い出しました。聞いたらグループ内で誰かの悪口を言い出して、それにグループ内のみんなが同調したからだそうです。その状況に耐えられなくなってグループを抜けるという選択ではなく、学校に行かないことを選ぶのです。なかなか目に見えないことなので、そういう時に、教師や学校関係の人たちは他者に対する敬意をどのように教えていけばいいのだろうかと考えます。私は「あなたたちのことはちゃんと見ているよ。大丈夫だよ」ということを伝えていくことにつながればよいと考えています。
- 残念なことですがけれど、いじめがあった学校で、先生の言葉に非常に腹が立つこともあります。いろんな意味で学級の在り方なんかもすごく大事だなということを思います。
- やはりいじめられている子は一番苦しいです。いじめる側の子は、とても楽しくて面白いて思っているかもしれないけれど、面白さの後ろには、その子の悲しみもあるということが見えています。だからいじめる子ども、いじめられる子ども、その子の生活環境というものがすごく重

要ではないかなと思います。

- 子どもたちの周りに、教職員や学校関係者等、善意ある大人がいっぱいいることで、いじめやそれに類するものが少なくなっていくのではないかなと、いつも思っています。
- 「いじめが解決した」という認識は、いじめの現象が起きていないと教員が判断したということなのだと思いますが、表面上はなくなったけれども、心に傷を負っている子はたくさんいるかもしれないということを、教員が認識することがとても大事だと思います。
- いじめている側は、「嫌なら嫌って言えばいいのに」と言うのだけれども、それを言えない子がいるのだということを知ってやる、このことが大事だと思います。
- 教育のあらゆる場面で、相手に対する敬意をもつことを教えたり学んだりすることが大事だと思います。
- 善意ある大人がほとんどいない環境で育っている子もいます。だからこそ、善意ある大人として、教師の存在はとても大事だと思います。
- 教師は善意ある大人ですが、何となく何気なく思わず使ってしまった言葉や言動がきっかけとなって、いじめにつながることもあるという危険性を意識することも大事だと思います。
- ある事例ですが、いじめにあって休んでいた子どもに対して、部活動顧問の先生が夜に電話をかけて「今日はお前が来なくてよかった」と言ったそうです。でもそのあと続けて、「今日の給食はまずかったからな。でも、お前が来ないと俺は寂しい。だから部活だけは、しに来いや」と。素晴らしい先生だと思います。決まり文句

を言うのではなく、その先生が感じた自分のメッセージを子どもに伝えることが、信頼関係を築けるということなのではないでしょうか。

- どういう立場の教員でもよいので、子どものすべてを丸ごと受け入れてあげると、つらい思いをしている子どもは、立ち上げられるんじゃないかなという気がすごくします。
- 担任の役割はとても大きくて、子どもたちをどういうふうに見ているかということが大事で、例えば、ちょっとしたトラブルでも、それに対してスルーしなくて、それをみんなの学びにつなげていけるような、そういう感性を持っているといいかなと思います。
- 子どもたちの個々の気持ちを把握する一つの手段として、心の健康観察といって、タブレットを使って、「晴れマーク」「曇りマーク」「雨マーク」「雷マーク」「雪マーク」など、その日の気分をクリックすると、全体で集計され、教員がそれをお互い共有できるようなことをやっている学校があります。また教員だけが把握するのではなく、子どもたちみんなが見える形でやると、友達の状況をわかるということもあります。「あれ、〇〇ちゃん、今、雷マークになったけど、何かあった？」と声掛けする場面もできます。

(市川三郷町教育長 渡井 渡)

